

■ 特集 ■

共生・共生教育とは何か

——高大連携「命の授業」を学際的に検討する——



「命の授業」で坪内先生に質問

(写真提供・国際学園北斗校)

生徒の感想から

「今まで自分が何も考えずにお菓子を食べていただけですごく考えました。今後はお菓子はやめようと思います。今日の動画を見てとても心動かされました。ゾウ、オランウータンがすごくかわいそうでした。今日の先生の話や動画を見たり思ったりしたことは、自分自身の未来をどれだけ壊しているか分かったし、他にもいろいろわかったのでとてもよかったです。」



「命の授業」でのグループワーク後の発表

「お菓子を食べても食べなくても変わらないから食べる。お菓子を食べないで変わることはお菓子の会社で働いていた人達のかなりの人が職を失うし、事実上の死を得ることになる。確かに野生動物を守ろう、自然を守ろうというのはとても賛成できて、それに向けて活動していることはよいことだと思いが、もう少し方法を変えたほうが良いと思った。」



「里山自然フィールドワーク」(新治市民の森)にて

生徒の感想から

「自然を見直すことで、見えないところで生物が日々の生活をしていることを改めて認識できたと思います。また、土などは生物にとって、とっても必要なものの一つだと思いました。講義を受けたことで前よりも水についての理解を深められたと思います。今回、森の土はスポンジのように隙間が多いこと、雨によって水が森の土へ運ばれること、生き物には食べ物と水、住まいが必要なことを認識しました。」



「森・水・自然の循環」の授業に聴き入る

「日々、使っている水が、以前は森の土がろ過装置になっていたが、時代とともに森の数も減り科学の力を使って水をきれいにしている。この講義を受け、時代とともに減ってしまった森や自然の生物を人間だけが利益を得るのではなく、自然の環境にも還元することが大切と感じた。そして、森は水の循環に必ず必要なものであり、食物連鎖(命の循環)を起こすスタートになると学んだ。」

はじめに

星槎大学共生科学部には教育(特別支援、初等教育ふくむ)、福祉、環境、国際関係、スポーツ身体表現などの学問分野があり、それぞれが共生を共通コンセプトに、共生教育を行っている。共生教育は大学の授業だけでなく、高大連携授業においても展開されている。共生教育のこのような広がりや深まりの中で、共生と共生教育をめぐって、学部の学問分野を横断するような議論は展開されているとは言えず、共生とは何か、共生教育とは何かについて、共通理解は深められていない。

—今回の特集では、環境分野のテーマでの高大連携授業「命の授業」を事例とする。

1. 「高大連携授業『命の授業』教育実践における成果と課題」では、授業やフィールドワークを担当した大学教員等が、授業の目標と計画、成果と課題などを明らかにする。
2. 「星槎学園高等部北斗校の高大連携授業実践報告」では、高校の先生方が教科・領域を横断する授業を設定し、生徒たちの「共感理解」の成長をとらえ、学びの成果を生徒自身が「発信」するのを支援したプロセスを明らかにする。大学教員からも高校教員からも、成果と同時に課題が提示されている。
3. 「共生・共生教育の成果と課題——他分野からのコメント」では、共生科学部内の環境以外の分野(教育、福祉、国際関係、スポーツ身体表現)を担当する教員のコメントを通して、高大連携授業という実践事例に即して、また学問分野・領域を横断する形で、共生・共生教育の到達点と課題を探究し合う。

高大連携授業については「教育研究活動」で取り扱うことも考えられる。今回は、大学教員と高校の先生方双方の授業分析と検討を進め、それをめぐって、各分野からコメントを得て相互に検討する構成とすることで、高大連携授業のいっそうの深まりと、共生および共生教育をめぐる学際的な研究の発展とを期待して、特集に位置づけたい。(編集委員会)